Irishisms in American English as Found in Erskine Caldwell's Short Stories

02E044 Mika Sasaki

〈Abstract〉

Erskine Caldwell (1903-87), the great and controversial American author who described the wretched life of poor white sharecroppers in his native Georgia in *Tabacco* Road and in other novels and short stories is one of the most widely read authors of the 20th Century.

Caldwell is the author of 25 novels, 21 nonfiction books and pamphlets, including the famous "Tenant Farmer" in 1935 and more than 150 short stories. More than eight million of his books have been sold to readers in 43 different languages. *God' s Little Acre* alone has sold over 14 million copies. He is a key person in the history of American publishing as he is one of the first authors published in mass-market paperback editions. His books display a keen insight into human nature and have made him America's most popular storyteller. The stage adaptation of Tabacco Road set a new record (3,182 performances) in legitimate theater history when it ran for seven and a half years on Broadway.

In Japan, 67 translations, including 15 novels, 2 autobiographies, 2 nonfiction works, and many short story collections, have been published from 1932 to 2003.

In the 17th Century, many immigrants from all over the world came to the New World, including those from Germany, Sweden, Italy, Poland, and Ireland. Although those from non-English speaking countries spoke their own mother languages, they basically had to depend on the English community of their new home. Irish immigrants, on the other hand, spoke Irish English in their country and brought with them their own unique and idiomatic expressions. As a result, there are many examples of Irish American English (Irishisms) in contemporary North American English.

The aim of this graduation thesis is to identify the presence of Irishisms in American English through a careful reading of three famous short stories by Erskine Caldwell, the Georgia-born American author. Those stories are "Country Full of Swedes," "Candy-man Beechum," and "Kneel to the Rising Sun." The chief reference of this thesis is Kenzo Fujii's *Irishism in American English*.

Erskine Caldwell の短篇小説にみる
アメリカ英語とアイリシズムの影響について

02E044　佐々木　美佳

はじめに

アメリカの南部作家アースキン・コールドウェル(Erskine Caldwell, 1903-87)は、芸術性と社会性をともに備えた、1930年代を代表する作家である。コールドウェルは、1903年12月17日、ジョージア州カウィータ郡モアランド近くのホワイト・オーク教会の牧師館に生まれた。祖父のウィリアム・コールドウェルは、ストーリー・テラーの名手として、近隣の人々を楽しませるので、シカモア郡でも評判であったことから、作家の才能はこの祖父からの遺伝であると考えられる。父のアイラ・シルヴェスター・コールドウェルは、連合改革長老派教会の牧師であり、一家は転々とアメリカ南部諸州を転住した。理由は、教区内の諸問題を処理する手腕を買われたためとも、父の自由主義的意見が貧乏白人たちと折り合わなかったためともいわれる。母はキャロライン・プレストン・ベルといって、ハイスクールや女子大学で教鞭を執ったことがあり、コールドウェルの少年期の教育（読み・書き・そろばん）は、専ら母の手に委ねられた。彼は、高校時代から大学時代にかけて雑多な仕事を経験している。綿実油搾取所や製材所の人夫、農園日雇、石工助手、食堂調理・給仕人、舞台係、船員、タクシー運転手、ボディガード、フットボール選手、新聞記者と、色々なアルバイトをした。こうした体験が、彼の数多くの作品の特質を形成する上で、好素材を提供している。正規の大学教育は、アースキンカレッジ、ペンシルバニア大学、バージニア大学で受けているが、いずれの大学からも学位は取得してはいない。その後、小説家になる決意をかため、東部沿岸地方のメイン州へ行くことに決めた。目的は職業作家になることであり、南部の生活を自分の知っているとおりに書くには距離をおいて見るのが一番のように思われたからである。メイン州の田舎は静かでのんびりとしていて、文明の痛みと苦しみから、はるかに遠ざかっており、ものを書く環境としては最適のように思われた。しかし、食料のためにジャガイモを植え、燃料の薪をつくるために木を伐り、書評を書いて下宿代を支払うといった試練の日々を強いられた。その中で様々な短篇を発表し続けた。彼が作品を書く上でいちばん重要な要素と考えているものは、できるだけ短い単語を使うことである。つまり、辞書を見なければわからないような単語は使わないということである。彼自身、「いつか私は、四音綴以上の単語は全部消して、自分専用の辞書をつくったことがある」(1) と述べている。コールドウェルにはメイン州を舞台にしたコミカルな小説もいくつかあるが、彼を有名にしたのはジョージア州の奥地の農村地帯を舞台にした作品である。「文明」からはるかに隔たった地方の痛めつけられて荒れてしまった「自然」の生活を取り上げた。そこに生きる貧乏白人（プア・ホワイト）と黒人を主として地方に生きる貧しく無知な人々の極限状況を描いた。1932年、コールドウェルは『タバコ・ロード』(*Tobacco Road*) によって全国に名を知られる作家になった。これは1930年代初頭、南部では大農園制度という特殊社会制度の包蔵する矛盾がプア・ホワイトと呼ばれる特殊な階層を生みだしたが、ジョージア州の一角で荒廃した土地にしがみついて飢えにひんしながら生きている貧乏白人一家を描いた作品である。この小説はベストセラーとなり、同じジョージア州出身のジャック・カークランドの手によって脚色され、ブロードウェイの舞台で実に7年半（3,182回）という長期上演記録をうちたてた。このほか、ジョージア州の農民を扱った土地と人間の崩壊の物語である『神の

小さな土地』(*God's Little Acre,* 1933) や社会批判をこめた諷刺小説である『巡回牧師』(*Journeyman,* 1935)、人種的偏見の問題を扱った社会の不正への抗議の小説である『七月の騒動』(*Trouble in July,* 1940) などを代表作品として挙げることができる。これらは長篇小説であるが、コールドウェルは、短篇小説でも高く評価されており、彼を短篇小説家とみなしている評論家は多い。亀井俊介氏は次のように述べている。

> コールドウェルの短篇小説はいいですよ。彼は基本的には短篇小説作家といえるかもしれない。フランスの代表的な短篇作家にモーパッサンがいますけれど、その影響を受けているらしく、じつにうまい構成、簡潔な文体で、おもに農民を登場させて、南部の姿とその問題を描いている。プロテストも、長篇小説より的確に、強烈になされていることが多い[(2)]。

コールドウェルは約150篇もの短篇小説を書いているが、今回は「スウェーデン人だらけの土地」('Country Full of Swedes', 1932)、「色男ビーチャム」('Candy-Man Beechum',1935)、「昇る朝日に跪け」('Kneel to the Rising Sun',1935)の三つの短篇をとりあげることにする。

私の卒業論文の眼目は、コールドウェルの主だった短篇小説の中にみられるアイリシズム (Irishism) の影響を論述することにある。本稿は、藤井健三氏の著書『アメリカ英語とアイリシズム』に負うところが多い。

アメリカ英語とアイリシズム

まず、アメリカの歴史は17世紀に英国が開いた植民地に始まる。ヨーロッパを中心とする世界各国からの移民の労働力によって開拓された「移民国家」建設の歴史である。スウェーデン、ドイツ、イタリア、ポーランド、アイルランドからは、とくに大量の移民が流れ込み、原野を切り拓いて道や農場をつくったり、石や煉瓦を重ねて村や町をつくったり、あるいは鉱山や油田を掘り当て、車や船をつくったり、鉄道を敷いたりして国をつくりあげた。その莫大な労役のほとんどを移民が担ったのだ。移民たちは当然のことながら、それぞれ異なった母語をもってアメリカへやって来た。しかし先着のイギリス人コミュニティーの助けに頼らざるを得なかった移民たちは、そこで英語を身につける必要に迫られ、多民族間の共通語となっていったのである。これが「移民国家アメリカ」の言語が英語となったゆえんである。

しかしイギリス本島以外からの数ある移民の中で、アイルランド人だけは、アメリカに辿り着いてから英語を身につける必要がなかった。なぜなら祖国でアイルランド英語を話していたからである。アイルランド人は、人種的にはケルト民族であり、ゲール語を母語としていたが、14世紀以来のイングランドからの侵略と植民地化によって英語を使うことが強いられた結果、発音・統語法ともにゲール語の影響を強く受けた独特の英語ができあがった。その英語を身につけ、約400万人のアイルランド人がアメリカにやってきたのである。

アメリカには地域方言(regional dialect)といえるものがほとんどなく、あるのは社会階層方言(cultural dialect)とでもいうべき、全米共通の「通俗語」(ないし「下層語」) だけである。これは独特なアイルランド英語に固執するアイルランド移民が全米を放浪し、やがて各地に土着していった結果である。その結果、アメリカのどの地方の土地言葉もみなほぼ同じ特色を共有しており、その特色はまたアイルランド英語の特色と共通している。さらにアメリカの黒人英語の特色もアイルランド英語と共通する点がきわめて多いというのも事実である。藤井氏は著書『アメリカ英語とアイリシズム』の中で次のように述べている。

> Georgia および South Carolina 両州の沿岸とその近海の島に奴隷として定住した黒人の、Gullah 方言といわれるとりわけくずれた黒人英語でさえも基本的にはアイルランド人労働者の英語に似ているという報告もある[(3)]。

アイルランド英語には、伝統的イギリス英語にはない多くの新しい語法が含まれている。藤井氏は次のよう

な例を挙げている。例えば「私は妻に先立たれた」をイギリスの伝統英語で表すには、'I had my wife die.' とするしかあるまい。しかしこれは妻を助けなかったとも解釈できる曖昧な表現である。意味の特定化は文脈に依存せざるをえない。

ところがアイルランド英語ではそれを 'My wife died on me.' という一文で決着をつける。'on me' は「私のことなど無視して」の意。これは「困ったことに」のニュアンスを表すゲール語の前置詞 "air" の機能を英語の on に担わせて導入したのである。この便利な語法は直ちにアメリカじゅうに受け入れられ、今日では 'She hung up *on me* with a bang.' (彼女は電話を一方的にがちゃんと切った)/ 'His wife walked out *on him*.' (彼は女房に逃げられた)のように標準英語として確立している [4]。

その他、藤井氏の前掲の著書に見られるいくつかの例を挙げるとすれば、次のようなものがある。1 つは 'Take it easy' というよく知られた決まり文句である。これもアイルランドから来た英語である。'take' を「我慢する、辛抱する、耐える」など受け身の意味に使うのも、状況を表す 'it' も、'easy' を「ゆっくり、そっと」の意味に使うのも、いずれもアイルランド起源の語法である。

またもう 1 つは 'I was dying to see you.' (あなたに会いたくてたまらなかった)という決まり文句である。これもアイルランドから来た表現である。'That kills me.' (これには参ったね) 'I went out the door.' (戸外に出た) 'You're welcome.' (どういたしまして) 'Will I sing a song?' (歌を歌いましょうか)など、多くの新鮮で平易なアイルランド表現がアメリカ英語に入ってきたのである。

アイルランドからと同様に、スコットランドからも多くの移民が流れ込んできた。スコットランドはアイルランドとは違って、イングランドに支配されたわけではない。1603 年にスコットランドの国王だったジェームズ一世が、エリザベス女王の後を継いでイングランドの国王に迎えられたので、イングランドの主権のもとに統治されることになったに過ぎないのである。スコットランド人はもとはアイルランド人と同じくゲール語を話すケルト民族であるが、17 世紀初頭にイングランドの統治下に置かれて、いち早く使用言語を英語に切り替えたのだ。しかし、アメリカに来たスコットランド人がアメリカ英語に影響を与えることはほとんどなかったのである。この点について、H. L. メンケンはアメリカの言語(1919)で一通信員の次のような報告を紹介している。

> スコットランド人は英国人よりも容易にその言語上の習慣を破棄するが、私にはアイルランド人が三者のうちで一番もとの習慣を放し難いと思われる [5]。

一方アイルランドは、イングランドに侵略され植民地とされた国であり、イギリス人は支配者としてアイルランド人を見下し、「ヨーロッパにおける最低最悪の野蛮人」と蔑んだ。支配者によって、自分の国の伝統や言語が無視され蹂躙されたアイルランド人は、イギリスに対する恨みと根深い抵抗精神が常にうごめき、一つの民族的気質となった。これは、イギリス人の英語が唯一正しく、上品なものという支配者の論理を抵抗無く受け入れたスコットランド人と対蹠をなす気質といえる。アイルランド移民の英語は、ヒステリックなほどに熱心だった 'schoolmarm' (女性教師)たちの常に非難の対象となったが、アイルランド人はそれを受け入れるほど従順ではなかった。抑圧されたアイルランド人の、支配者に対する抵抗精神はアメリカに渡ってからも民族の気質として残り、アイルランド訛を容易には変えようとしなかったのである。

作品研究

本論文でとり扱う作品は、下記の 3 つの短篇小説である。

(1)「スウェーデン人だらけの土地」'Country Full of Swedes' (1932) について

この作品("Country Full of Swedes")は、東部ニュー・イングランドの一角をなす小さな州であるメイン州の海岸べりの町イースト・ジョロピ(East Joloppi)を背景とし、人種的偏見や無知から生ずる対人恐怖をユーモ

ラスに描いて、コールドウェルの人物の属性ともいうべきイノセンスとナイーヴィティを浮き彫りにしている。この作品の主調は云うまでもなくユーモアであるが、ほら話・滑稽話を素材とする、いわゆるアメリカン・ユーモアである。スウェーデン人を何か恐ろしい得体の知れない人種と思い込んでいるニュー・イングランドの老農夫婦（ジム・フロストとフロスト夫人）の無知と偏見がユーモラスに描かれている。はじめのうちは、閉鎖的で偏屈な「北部アメリカ人（ヤンキーズ）」の人種的偏見や誤解であろうと思っていたことが、老農夫婦が執拗に言い張るように、やはりスウェーデン人というのは、傍若無人に振舞う乱暴で手に負えない人種だということが解ってきて、何やら一杯喰わされたような感じを受けるのである。

(2)「色男ビーチャム」'Candy-Man Beechum'（1935）について

この作品(“Candy-Man Beechum”)のモチーフは黒人を主人公とし、黒人の人間的蘇生、人間性の復活を根底においていると考えられる。要するに、黒人たちは白人の抑圧の下で人間性を無視されてきたが、彼らもまた、それぞれに魅力的な人格や個性の持ち主であることを訴えかけているのである。キャンディマン・ビーチャムは土曜の午後おそく、仕事場から 10 マイルも離れた町はずれに住む女のところへ逢いに行く。作者は縦横な想像力と巧みな話術を駆使して、一つの豊かなファンタスティックな世界をつくり出している。長身で健脚家のキャンディマンが暮れかかるジョージアの広々とした高地の小谷をはやる心で大跨に渡っていく姿は、軽快なテンポの、生気に満ちたリズミカルな文章で写し出されている。途中、子供たちと交わすキャンディマンの会話はユーモラスで撥剌としている。この作品は、詩情あふれる散文詩のような文体で綴られている。

町に入って、つま先立ちして自分を待っている娘のことを考えると、矢も楯もたまらぬが、その前にまず、いいにおいのするナマズのフライを一皿というところで白人の夜警に呼びとめられる。ただ元気のよすぎる黒ん坊は、面倒をおこしやすいという理由からだけである。手錠をかけられまいとあとずさりするキャンディマンに夜警はピストルを発射する。ここから汲み取るべきものは、単なる抗議や黒人復権の主張だけではなく、作者が静かにうったえてくるヒューメインな情感である。

(3)「昇る朝日に跪け」'Kneel to the Rising Sun'（1935）について

この短篇小説(“Kneel to the Rising Sun”)は、コールドウェル自身が“a short novelette or a long short story”と述べているように、すべての短篇の中でもっとも長いもので、むしろ彼の場合、中篇小説と言って差し支えない。そして全体は3章からなり、ストーリーの構築も各章を追って導入から展開、そしてクライマックスへというオーソドックスな手順をふんで、劇的な盛り上がりと効果をたくみに演出している。この作品は、貧困や人種的偏見や暴力など荒廃した南部社会の現実を背景として、友情と信義を裏切った男の精神的苦悩という、人間心理のドラマを激越な調子で巧みに物語ったものである。と同時に、そのような悲劇をもたらす残酷な社会のしくみを告発し、何らかの社会改革を訴える力強い響きをもった作品になっている。

主な登場人物は、脅しと暴力で小作人を収奪する悪虐な地主のアーチ・ガナード、その地主に打ちのめされる一方で抵抗する気力もない小心者の白人小作人ロニー。ロニーとは正反対に強い自我と正義感をもち、横暴な地主に対しても堂々と自己主張する、勇気のある黒人クレムの3人である。乏しい割り当て食糧(rations)に対して、不平も言えない気の弱い白人ロニーに加担した黒人クレムが、地主アーチとの争いがもとで虐殺されるというもので、物語のもっとも中心に描かれているのは、白人ロニーと黒人クレムとのあいだの友情と信義を、ロニーの側が一方的に裏切ったときの、その背信の行為と良心の呵責という人間心理の葛藤に他ならないのである。

そこで上記の3つの短篇を通して、アメリカ英語において、アイルランド英語がどのような影響を与えてい

るのか、換言すれば、アメリカ英語におけるアイリシズムの影響について考察していくことにする。以下、作品名を(1) 'CFS'、(2) 'CMB'、(3) 'KRS' と略記する。加えて、'The Strawberry Season' は 'TSS' と略記する。

Ⅰ. 統語法に関して

1. 'be after～ing' の完了形

アイルランド英語には、現在完了に当たる形式がないので、例えば 'I have finished my work.' は 'I am after finishing my work.' のように、'be after～ing' の形で表されることがある [(6)]。次の用例が見られる。

They're not after taking anything that belongs to you and Mrs. Frost. (CFS, p.12, ll.19-20)

あんたや奥さんの物を取るんじゃないんだ。

They're not after doing hurt to your flowers. (CFS, p.12, ll.27-28)

あんたの花をだめにするんじゃないんだよ。

2. 'the likes of～' の句

'the likes of～' は「～のような人」の意で、アイルランドで一般によく使われる表現である。アメリカでは「人」だけでなく「事物」にも適用される。like には-s がついているのが普通だが、脱落していることもある [(7)]。次の用例が見られる。

I have never seen the like of so much yelling and shouting anywhere else before ; but down here in the State of Maine, in the down-country on the Bay, there's no sense in being taken back at the sights to be seen, because anything on God's green earth is likely and liable to happen between day and night, and the other way around, too. (CFS, p.7, ll.28-32)

こんなにひどくわめきどなっているのは、ほかの土地では見たことがない。だがこのメイン州の海に近い低地地方では、こんなのを眺めて面喰うようではしょうがないんだ、この土地ではこの世の中であることなら何でも、昼と夜の間にも夜と昼の間にも起りそうだし、また起りがちだからだ。

I've never seen the like of all that's going on. (KRS, p.664, l.1)

あたしゃこんなこたあ見たこともねえだよ。

3. 'mad' (=angry)

'mad' はアイルランド英語では angry の意味にも使われる。angry の意味にだけ使うわけではなくゲール語の "*buileamhail*" と同様に、mad と angry のどちらの意味にも使われる [(8)]。次の用例が見られる。

I'll swear, those big Swedes sounded like a pastureful of hoarse bulls, near the end of May, mad about the black flies. (CFS, p.11, ll.7-8)

正直な話、大きいスウェーデン人の声は、五月の末に牧場にいっぱいいる牡牛が、ぶゆ虻のため気違いになっているときのようにやかましかった。

Both Jim and me thought at first she had fallen through the window, but when we looked again, we could see that she was still on the inside, and madder than ever at the Swedes. (CFS, p.15, l.35～p.16, l.2)

ジムも私も初めは彼女が窓から跳びだしたのかと思ったが、よく見るとまだ中にいて、いっそうスウェーデン人に腹を立てていた。

Jim, don't let Stanley make the Swedes mad. (CFS, p.17, l.12)
ジム、スタンリにスウェーデン人を怒らせるようなことをさせないで。
"Good God, no," he said, his eyes popping out ; "but don't go making them mad." (CFS, p.17, ll.20-21)
「とんでもない、でも奴らを怒らせるつもりはないさ」ジムは目玉をつき出すようにして言うのだった。
Arch was already mad enough about being waked up in the middle of the night, and Lonnie knew there was no limit to what Arch would do when he got good and mad at a Negro. (KRS, p.655, ll.16-19)
アーチは真夜中に起こされたことでもうすっかり頭にきているし、黒人に対して本当に腹を立てたときには何をしでかすかわからない男であることをロニーは知っていた。
Arch Gunnard talks that way when he's good and mad. (KRS, p.657, ll.13-14)
アーチ・ガナードがあんな言い方をするときゃ本気で腹を立てているんだ。
But Arch was mad enough to do anything; he was mad enough at Clem not to stop at anything short of lynching. (KRS, p.659, ll.18-20)
しかしアーチはどんなことでもやりかねないほど怒り狂っていた。リンチ以外には承知しないほどにクレムに腹を立てていた。

4. 'out the door' (=out of the door)

'out the door' はofが省略されたのではなく、元々ofのないアイルランド英語がアメリカに入ったのである。よってアメリカでは 'out of the door' の二つの形が並存する[9]。次の用例が見られる。
Jim had busted through the door already, but when he heard that Boom! sound he sort of spun around, like a cockeyed weathervane, five-six times, and ran out of the door again like he had been shot in the hind parts with a moose gun. (CFS, p.4, ll.22-26)
ジムは部屋へ跳びこんでいたが、そのブーム!という響きをきくと曲がっている風見みたいに五、六度くるくる廻り、また駈けだして行った、鹿だまでも尻にあたったように。
Jim ran to the side door and out the back of the house, but I took my time about going. (CFS, p.6, ll.18-19)
ジムは横手のドアへ駈けより裏へ出て行ったが、私はゆっくりかまえていた。

5. 'out the window' (=out of the window)

'out the window' はアイルランドから入った 'out the door' の類推のよってアメリカで生まれた。よってこれはアイルランド系語法(Irish-American)であるといえる[10]。次の用例が見られる。
I ran across the hall to look out a window, but it was on the wrong side of the house, and I couldn't see a thing. (CFS, p.5, ll.30-31)
私は廊下を渡り窓から覗こうと駈けよったが、反対側だったので何も見えなかった。
God-helping, there were Swedes all over the country, near about all over the whole town of East Joloppi, for what I could see out of the window. (CFS, p.7, ll.3-5)
ほんとに、窓から見えるかぎりその辺一体は、イースト・ジョロピの町全体と思えるほどのスウェーデン人だった。
I was standing there all that time, looking out the window at the Swedes across the road, when Jim came into the kitchen with an armful of wood and threw it into the wood box behind the range. (CFS, p.8, ll.8-10)
道路をへだてて、窓からスウェーデン人を眺めてずっとそこに立っていると、ジムが薪を一抱え台

所へ運んできて、かまどのうしろの薪入箱へ投げ入れた。

"Now, hold on, Jim," I said, looking out the window. (CFS, p.8, l.27)

「おい、ちょっと待て、ジム」私は窓の外を見ながら答えた。

Let's just sit here and finish eating the beans, and watch them out the window. (CFS, p.12, ll.20-21)

ここに坐って、豆を食べながら窓から見ていようよ。

6. 'let out～' の構文

let out a yell' は、伝統英語なら動詞では 'yell'、名詞なら 'give a yell' でよいのだが、ゲール語では例えば「彼はワッと叫び声をたてた」は "do leig sé gém as" というので、アイルランド英語ではそれが "He let a roar out of him." と直訳される。この直訳構文がそのままアメリカへ入ってきたのである[11]。次の用例が見られる。

Mrs. Frost took one look at them, and then she let out a yell, but the kids didn't notice her at all. (CFS, p.12, ll.35-36)

ミセス・フロストはその二人をちょっと見て、わめいたが、子供はけろっとしていた。

The kid let out a yell and a shout that must have been heard all the way to the other side of town, sounding like a whole houseful of Swedes up in the maple. (CFS, p.15, ll.14-17)

子供はわめいたりどなったりしたが、町の向う側でも聞えるくらいの、家じゅうのスウェーデン人が楓に登っているかと思うほどの大声だった。

The little Swede let out a yell and a whoop when he hit the ground that brought out six-seven more Swedes from that three-story, six-room house, piling out into the road like it was the first time they had ever heard a kid bawl. (CFS, p.16, ll.11-14)

その子供が地面にぶつかるときわいわいわめいたので、あの三階建六部屋の家から、子供の泣きわめくのは初めてだというように、六、七人もスウェーデン人が道路へ集ってきた。

7. 'for good' (=finally, for ever)

'for good' はアイルランド英語では 'finally, forever' の意に使われる[12]。次の用例が見られる。

"I thought you said they were gone for good, this time." (CFS, p.6, ll.1-2)

「もう帰って来ないってあんたがいったようだが」

I'd hate to wake him up, but I'm scared Pa might stray off into the swamp and get lost for good. (KRS, p.651, ll.14-15)

寝てるのを起こすのはわるいが、おとっつぁんがあの沼沢地に迷い込んじまったらもう出てこれねえんじゃねえかと心配でよ。

8. 'good and～' (=very, extremely)

'good and～' は二語一意の intensive で「～」部分の形容詞や副詞を強調する。これはほぼ同義の 'nice and～' とともに、アイルランド英語がスコットランド英語およびアメリカ英語と共通する語法である。*'good'* は「じゅうぶんな(に)」が元々の意[13]。次の用例が見られる。

Jim was all for telling him to make the boy come down out of the maple before it bent over and split wide open, but I knew there was no sense in trying to make him come down out of there until he got good and ready to come, or else got the yellow tom by

the tail. (CFS, p.14, ll.28-31)
ジムは楓が曲り切って裂けないうちに、子供を下ろしてくれと言いたくてむずむずしていたのだが、子供が自分で下りてくるか、黄色い牡猫の尻尾を掴むまではそこから下ろそうとしてもむだだと私は知っていた。

It was good and plenty though, whatever it was. (CFS, p.15, l.9)
なんにしろ、ふんだんにまくしたてたかったろうが。

I'm getting good and tired of chasing fighting niggers all over town every Saturday night. (CMB, p.26, ll.1-2)
土曜の晩になると喧嘩する黒人を町じゅう追っかけ廻すのはいい加減いやになってるんだ。

Arch was already mad enough about being waked up in the middle of the night, and Lonnie knew there was no limit to what Arch would do when he got good and mad at a Negro. (KRS, p.655. ll.16-19)
アーチは真夜中に起こされたことでもうすっかり頭にきているし、黒人に対して本当に腹を立てたときには何をしでかすかわからない男であることをロニーは知っていた。

"You know good and well why he got eaten up by the fattening hogs," Clem said, standing his ground. (KRS, p.656, ll.4-5)
「あんたはどうしてこの人が肥育中の豚に食い殺されたか、よくわかっているはずだ」クレムは一歩も退かずに言った。

You know good and well that's how he got lost up here in the dark and fell in the hog pen. (KRS, p.656, ll.11-12)
あの人がこの辺の暗がりの中で迷っちまって豚小舎に入りこんだことぐれえ、あんたもわかりそうなもんだ。

Arch Gunnard talks that way when he's good and mad. (KRS, p.657, ll.13-14)
アーチ・ガナードがあんな言い方をするときゃ本気で腹を立てているんだ。

"You must be out of your head, because you know good and well you wouldn't talk like a nigger-lover in your right mind." (KRS, p.660, ll.21-23)
「おめえは気が変になっているんだ。正気のときに黒ん坊びいきみてえな口はきかねえことぐらい、自分でもよくわかっているじゃねえか」

It usually stopped midway of her back and there we slapped it good and hard. (TSS, p.2, ll.9-10)
そしてそれが背中の途中で止まったところで思い切り叩く。

9. 'have＋目的語＋～ing' 構文

'have＋目的語＋～ing' を経験と使役の意味に使うのはアイルランド語法である[14]。次の用例が見られる。

We were hitched to make a fine team, and I never had a kick coming, and Jim said he Didn't either. (CFS, p.4,l.35～p.5, l.1)
実によく呼吸の合った相棒同士で、私がぐちをこぼしたこともなければ、ジムも自分だってそうだといっていた。

There was no stopping him then, because he had the ax going, and it was whipping around his shoulders like a cow's tail in a swarm of black flies. (CFS, p.15, ll.27-29)

はずみをつけた斧がぶゆの群を打つ牛の尻尾みたいに肩のあたりでうなっているので、もう止めるすべもなかった。

10. 'not give a damn' 構文

'not give a damn'(ちっとも気にしない、構わない)はアイルランド英語の'not give a shit', 'not care a damn' からできたIrish-Americanである[15]。次の用例が見られる。

The Swedes were yelling and shouting at one another, the little Swedes and the women Swedes just as loud as the big Swedes, and it looked like none of them knew what all the shouting and yelling was for, and when they found out, they didn't give a damn about it. (CFS, p.7, ll.21-24)

わめき合いどなり合い、子供も女も大人の男にまけず大声で、何のためにどなったりわめいたりしているのか自分でもわかっていない風だったし、気がついても何とも思わなかったのだ。

11. 'on top of' (=on the top of)

'on top of' は伝統的イギリス英語では 'on the top of' だが、アイルランド英語では　定冠詞を伴わない[16]。次の用例が見られる。

Then on top of that, they went and painted the barn red. (CFS, p.9, l.36)

それからおまけに納屋は赤ときてる。

The tree came down, the little Swede came down, and the big yellow tom came down on top of everything, holding for all he was worth to the top of the little Swede's head. (CFS, p.16, ll.7-9)

木が下を向くと、子供も下を向き、一番てっぺんの大きな黄色い猫も子供の頭上でしっかりしがみついたまま下へ向ってきた。

12. 強意の他動詞構文

アイルランド英語では、他動詞と目的語の間に「内臓物+out+of」を挿入して、内臓が飛びだすほど「ひどく～殴る、叩きのめす」という形式の他動詞強調構文がある[17]。次の用例が見られる。

That Boom! so early in the forenoon was enough to scare the daylights out of any man, and Jim wasn't any different from me or anybody else in the town of East Joloppi. (CFS, p.4, ll.26-28)

あのブーム!という朝っぱらの響音で胆をつぶさない者はあるまいし、ジムも私やイースト・ジョロピの町の他の者と同じ人間なのだ。

It's a God-awful shame for Americans to let Swedes and Finns and the Portuguese scare the daylights out of them. (CFS, p.6, ll.22-24)

スウェーデン人やフィンランド人やポルトガル人におどかされるなんて、アメリカ人にびくびくするなんて見たこともない。

There was no sense in letting the Swedes scare the daylights out of us. (CFS, p.14, ll.24-25)

スウェーデン人なんかにびくびくするなんてしょうのないことだった。

(この際の 'daylights' は light「肺臓」の意味。それが「光り」と混同されて前に 'day-' がつけられたものである[18]。)

13. ‘動詞＋身体の一部＋off’ の構文

「身体の一部が引きちぎれるほど強く～する」のこのアイルランド表現は前項 12 の「内臓が飛びだすほど強烈に～する」という発想の類型。アイルランド英語には ‘talk one’s head off’, ‘shoot one’s mouth off’ (喋りまくる)のように標記構文をよく使う。これは ‘他動詞＋内臓物＋out of’ の類型である [19]。次の用例が見られる。

There were Swedes everywhere a man could see, and the ones that couldn't be seen could be heard yelling their heads off inside the yellow clapboarded house across the road. (CFS, p.7, ll.7-9)

目のとどくかぎりはスウェーデン人で埋まり、姿の見えない者も向い側の黄色い羽目板ばり家の中でむちゃくちゃにどなっている声がした。

Just then the kitchen door burst open, and the two little Swedes stood there looking at us, painting and blowing their heads off. (CFS, p.12, ll.33-34)

ちょうどそのとき台所のドアがさぁっと開いて、子供のスウェーデン人が二人私たちを見つめてぜいぜいはあはあ息をはずませていた。

14. 時を表す名詞の接続詞用法

アイルランド英語では ‘the time’, ‘the moment’, ‘the first time’ などの時または順序を表す名詞をそのまま接続詞的に使い、副詞節または名詞節をつくる。これはゲール語の直訳から発達したもので、今日ではアメリカ英語の特徴と考えられているくらい普及している。これはアメリカ英語に ‘the first (or next) thing I knew’ などの副詞節をもたらした [20]。次の用例が見られる。

I can recall the first time they came to East Joloppi ; they built that house across the road then, and if you've ever seen a sight like Swedes building a house in a hurry, you haven't got much else to live for. (CFS, p.9, ll.24-27)

奴らがイースト・ジョロピへ来だした時のことをおぼえている。向い側のあの家はその時建てたんだが、スウェーデン人が大急ぎで家を建てるところを見たら、他に見る値打のあるものなんかありゃしない。

This is the first time you've ever seen those Swedes across the road, and that's why you don't know what they're like after being shut up in a pulpwood mill over to Waterville for four-five years. (CFS, p.10, ll.15-17)

道路の向うのスウェーデン人を見るのは初めてなんだし、四、五年もウォータヴィルのパルプ工場に閉じこもって来てるんだから今はどうなのかはお前にはわからんのだ。

The little maple shook all over every time the ax blade struck it, like wind blowing a cornstalk, and then it began to bend on the other side from Jim and me where we were shoring it up with the two-by-fours. (CFS, p.15, ll.29-31)

小さな楓は斧の刃が当るたびに、風がとうきびの茎にあたるように大揺れに揺れて、ジムと私が二インチに四インチの角材で支えている反対側へ曲りだした。

The little Swedes let out a yell and a whoop when he hit the ground that brought out six-seven more Swedes from that three-story, six-room house, piling out into the road like it was the first time they had ever heard a kid bawl. (CFS, p.16, ll.11-14)

その子供が地面にぶつかるときわいわいわめいたので、あの三階建六部屋の家から、子供の泣き

わめくのは初めてだというように、六、七人もスウェーデン人が道路へ集ってきた。

She began crawling towards them on her belly, wagging her tail a little faster each time Arch's fingers snapped. (KRS, p.641, l.29-p.642, l.1)

彼が指を鳴らすたびに犬は少しずつ尻尾をはやく振り、腹這いになってこっちへやってきた。

The first thing he saw when he looked up was Arch Gunnard twirling Nancy's tail in his left hand. (KRS, p.646, ll.9-10)

彼が顔を上げて最初に見たのはナンシーの尻尾を左手に持ってくるくる回しているアーチ・ガナードの姿であった。

15. 'like' の接続詞用法

There I was, standing in the middle of the chamber, trembling like I was coming down with the flu, and still not knowing what God-awful something had happened. (CFS. p.3, ll.1-3)

私は寝室のまん中につっ立って、流感にやられたようにふるえているだけで、どんなとてつもないことが起ったのか見当がつかなかった。

It was about half an hour after sunrise, and a gun went off like a cofferdam breaking up under ice at twenty below, and I'd swear it sounded like it wasn't any farther away than my feet are from my head. (CFS, p.3, ll.5-7)

陽が上って三十分ぐらいだし潜函が零下二十度の氷の中で壊れるような響音をあげて鉄砲の音が炸裂したし、それもつい目と鼻の先で響いたのだ。

That gun shot off, pitching me six-seven inches off the bed, and, before I could come down out of the air, there was another roar like somebody coughing through a megaphone, with a two-weeks cold, right in my ear. (CFS, p.3, ll.7-10)

鉄砲の響で私は六、七インチもベッドではね上り、それから又はね戻らないうちに私の耳を貫ぬいて、二週間も風邪をひいている男がメガフォンで咳をするような叫び声がした。

（この場合のように like＝as if のとき、次の連結動詞が落ちることがあるのに注意 (21)。）

Even if I didn't know what God-awful something had happened, I knew things around the place weren't calm and peaceful, like they generally were of a Sunday morning in May, because it took a stiff mixture of heaven and hell to get Jim and Mrs. Frost up and out of a warm bed before six of a forenoon, any of the days of the week. (CFS, p.4, ll.4-7)

どんな恐ろしいことが起ったのかはわからなくても、家の中がいつもの五月の日曜の朝のように、静かで寛いだ気分でないことはわかった。何曜日にしろ、ジムやミセス・フロストが六時前に暖いベッドから起きるには、天と地をごちゃごちゃにしたような騒ぎが必要だったからだ。

Jim had busted through the door already, but when he heard that Boom! sound he sort of spun around, like a cockeyed weathervane, five-six times, and ran out of the door again like he had been shot in the hind parts with a moose gun. (CFS, p.4, ll.22-26)

ジムは部屋へ跳びこんでいたが、そのブーム!という響をきくと曲っている風見みたいに五、六度くるくる廻り、また駈けだして行った、鹿だまでも尻にあたったように。

He just turned around and jumped through the door to the first tread on the stairway like his mind was made up to go somewhere else in a hurry, and no fooling around at the start. (CFS, p.4, ll.28-30)

ジムはぐるりと向きを変えて、ドアを駆けぬけ階段の一段目へ跳んでいた、大急ぎで他の場所へ行くことにきめた以上こんなところでぐずぐずしてはおれんという恰好だった。

The echo of that gunshot was still rolling around in the hills and coming in through a megaphone sounded again right there in the room and everywhere else, like it might have been, in the whole town of East Joloppi. (CFS, p.5, ll.3-6)

こだまなのか鉄砲なのか、つづいて山々に轟いて、窓からはいってくるちょうどそのとき、メガホンから咳が聞えるようなとんでもないウーップという音が、部屋の中でも外でもイースト・ジョロピの町全体ではないかと思うほどまた響いてきた。

He stood there, looking up at me like a wild-eyed cow moose surprised in the sheriff's corn field. (CFS, p.5, ll.13-15)

そして郡の治安官のとうきび畑のまぎれこんで現行犯をおさえられた牝の大鹿みたいに目だけ怒らして私を見上げていた。

"Good God, yes!" he said, his voice croaking deep down in his throat, like he had swallowed too much water. (CFS, p.5, ll.23-24)

「畜生、そうなんだ!」と答えた声は水でも飲みすぎたように、咽喉の奥のほうでがあがあいっていた。

Stanley doesn't know the Swedes like we do. (CFS, p.9, ll.6-7 ; p.10, ll.2-3, l.30 ; p.11, ll.1-2, l.4, ll.9-10, ll.10-12, l.32)

スタンリは奥地からやってきたからスウェーデン人のことは知らないのさ。

The yellow tom was as large as an eight-months collie puppy, and he ran like he was on fire and didn't know how to put it out. (CFS, p.12, ll.9-11)

生後八ヵ月のコリー種の子犬ぐらいの大きさはあった。猫は体に火がついて自分でもどうしてその火を消してよいかわからぬように走っていた。

In no time, it seemed to me like, he was up amongst the limbs, jumping around there from one limb to another like he had been brought up in just such a tree. (CFS, p.13, ll.22-24)

あっという間に、私の感じだが、もう枝のあたりへ上って、ちょうどこんな木の中で育ったかと思うほど枝から枝へと飛びまわった。

The big Swedes across the road heard the fuss we were making, and they came running out of that three-story, six-room house like it had been on fire inside. (CFS, p.14, ll.1-3)

道路の向うの大きなスウェーデン人が私たちの騒ぎを聞きつけて、三階建六部屋の家から中が火事になったときのように駈け出して来た。

Just then another big Swede came running out of that three-story, six-room house across the road, holding a double-bladed ax out in front of him, like it was a red-hot poker, and yelling for all he was worth at the other Swedes. (CFS, p.14, ll.32-35)

ちょうどそのとき、道路の向うの三階建六部屋の家から、べつなスウェーデン人が、両刃の斧を焼火箸でも持つように前へ突き出し、声を絞って他のスウェーデン人たちにわめきながら跳びだしてきた。

The little Swede let out a yell and a whoop when he hit the ground that brought out six-seven more Swedes from that three-story, six-room house, piling out into the road like it was the first time they had ever heard a kid bawl. (CFS, p.16, ll.11-14)

その子供が地面にぶつかるときわいわいわめいたので、あの三階建六部屋の家から、子供の泣きわめくのは初めてだというように、六、七人もスウェーデン人が道路へ集ってきた。

The women Swedes and the little Swedes and the big Swedes piled out on Jim and Mrs. Frost's front lawn like they had been dropped out of a dump truck and didn't know which was straight up from straight down. (CFS, p.16, ll.14-17)

女や子供や男のスウェーデン人がジム夫妻に家の前の芝生に群って、ごみのトラックから落ちてどちらが上か下かわからないほどごった返した。

You don't know the Swedes like we do. (CFS, p.17, l.15)

お前は俺たちみたいにスウェーデン人のことは知らないんだ。

That sawmill fireman would have to pull on that Monday-morning whistle like it was the rope to the promised land. (CMB, p.25, ll.17-18)

あの製材所のかま焚きの奴、月曜の朝は天国とつながる縄を引くようにおそるおそる号笛を鳴らさなくちゃならんだろう。

He talked just like he did that time he carried Jim Moffin off to the swamp—and Jim never came back. (KRS, p.657, ll.14-15)

この前、ジム・モフィンを沼地へ引き立てていったときとそっくり同じ言い方よ—それっきりジムは戻ってこなかったよな。

16. 'busy～ing' の構文

'busy～ing' は伝統英語では 'busy in～ing' の動名詞構文であったが、アイルランド英語では動名詞構文ではなく分詞構文である。したがって初めから前置詞はなかった。それがアメリカ英語に入った[22]。次の用例が見られる。

The big Swedes are busy carrying in furniture and household goods. (CFS, p.8, ll.29-30)

大人のスウェーデン人は、せわしそうに家具や家財を運んでいる。

17. 'the way' の接続詞的用法

アイルランド英語では方法・あり方を表す名詞 'the way' をそのままで接続詞として使い、副詞節または名詞節をつくる[23]。次の用例が見られる。

They didn't like the way that big coon talked. (CMB, p.25, ll.7-8)

その大男の黒ん坊の言い方が気にくわなかったのだ。

But there ain't much use in living if that's the way it's going to be. (CMB, p.26, ll.29-30)2

でもそうなるより仕方ないなら生きていたってむだです。

"If that's the way it's to be, then make way for Candy-Man Beechum, because here I come." (CMB, p.27, ll.3-4)

「そうなるよりしょうがなけりゃ、キャンディ・マン・ビーチャムに道をあけてやってくれ、俺が通るんだから。」

Mark had not acted any more strangely during the past week than he ordinarily did, but Lonnie knew he was upset over the way Arch Gunnard was giving out short rations. (KRS, p.649, ll.32-34)

父親のマークの行動にここの一週間、これまでと特に変わったところはなかったが、アーチ・ガナードがくれる割り当て食糧が足りないことで父親の気持ちが穏やかでないことはロニーにもわかっ

ていた。

It wouldn’t take much to make me do you up the way you belong. (KRS, p.655, ll.9-10)

てめえなんぞ片付けるこたあ屁でもねえこった。黒ん坊にふさわしいやり方でな。

18. ‘them’（=they, those）

アイルランド英語では、‘them’ を they や those の代わりに使う[24]。次の用例が見られる。

Them you see are little Swedes out there, and they're not going to make off with anything of yours and Mrs. Frost's. (CFS, p.8, ll.27-29)

あそこにいるのはスウェーデン人の子供だぜ、だからあんたや奥さんの物なんか持って行かんよ。

“Them fattening hogs always get enough to eat,” Clem said. (KRS, p.651, l.6)

「あの肥育中の豚どもにゃ、いつもたっぷり食い物があってよ」クレムが言った。

Them hogs will tear you to pieces, they're that wild. (KRS, p.651, ll.28-29)

あいつらに八つ裂きにされちまうぞ。

19. ‘sort of’ の副詞用法

英語の sort にあたるゲール語の “saghas” には ‘somewhat’ の意の副詞用法があることによる。大抵の場合、動詞を修飾する形で使われる[25]。次の用例が見られる。

Jim had busted through the door already, but when he heard that Boom! sound he sort of spun around, like a cockeyed weathervane, five-six times, and ran out of the door again like he had been shot in the hind parts with a moose gun. (CFS, p.4, ll.23-26)

ジムは部屋へ跳びこんでいたが、そのブーム!という響をきくと曲っている風見みたいに五、六度くるくる廻り、また駈けだして行った、鹿だまでも尻にあたったように。

“Jim,” Mrs. Frost said, shaking her finger at him and looking at me wild-eyed and sort of flustered-like, “Jim, don't you sit there and let Stanley stop you from saving the stock and tools. (CFS, p.9, ll.4-6)

「ジム」とミセス・フロストはジムに向って、指を動かし興奮して慌て気味に私を見ながら声をかけた。「ジム、坐りこんでスタンリのいうことなんかきいて牛や道具をしまわなきゃだめよ。

When she saw that swarm of Swedes coming across her lawn, and the big yellow tomcat in her flower bed among the tender plants and bulbs, digging up the things she had planted, and the Swedes with there No.12 heels squashing the green shoots she had been nursing along—well, I guess she just sort of caved in, and fell out of sight for the time being. (CFS, p.16, ll.19-24)

自分の芝生を踏み越えてやってくるスウェーデン人の群や、花壇の弱い草や球茎の中で大きな牡猫が自分の植えたものを掘り返すのや、大事にそだてている緑の芽を特大の足でスウェーデン人が踏みにじるのを見ていたので—きっと彼女はくたくたとすぐに倒れて見えなくなったのだろう。

If you'd only sort of help me out a little, he wouldn't. (KRS, p.658, l.6)

あんたがなにかちょっと力になってくれりゃ、あいつもそこまではやらねえと思うんだが。

20. ‘leave’ を ‘let’ の意味で使う

“Me and white-folks don’t mix,” Candy-Man told him, “just as long as they leave me be. (CMB, p.23, ll.15-16)

「俺と白人が悶着を起すことはないさ」キャンディ・マンは答えた。「ほっといてくれりゃな。」

“No time to waste, white-boss. Just let me be.” (CMB, p.25, l.33)

「ぐずぐずしておれんのです、旦那さん。ほっといて下さい」

White-boss, please just let me be. (CMB, p.26, l.12)

白人の旦那、どうかほっといて下さい。

21. ‘like’ を ‘as’ の意で接続詞・前置詞として使う

Now you go on to sleep like I told you, Hatty. (KRS, p.649, l.17)

それより、おめえはおらが言うように寝ていた方がええ、ハッティ。

They were biting and snarling at each other like a pack of hungry hounds turned loose on a dead rabbit. (KRS, p.651, ll.24-25)

豚たちはお互いに噛み付いたり唸りあったりしていた。ちょうど、綱を解かれた一群の飢えた猟犬が死んだ一匹の兎をうばいあって争っているようだった。

“That looks like it might be your pa,” he said. (KRS, p.652, l.1)

「ありゃ、どうもあんたのおとっつぁんらしいぜ」クレムはやっと言った。

He’s been on short rations like everybody else working on your place, and he was so old he didn’t know where else to look for food except in your smokehouse. (KRS, p.656, ll.8-10)

あんたの所で働いている他の誰もが同じだが、あの人は不足がちの割り当て食糧でやっと命をつないできた。だけどよぼよぼになっちまって、あんたのところの薫製小屋の他に食い物を探すところがわからなかったんだ。

The crumpled body was tossed time after time, like a sackful of kittens being killed with an automatic shotgun, as charges of lead were fired into it from all sides. (KRS, p.663, ll.10-12)

ぐしゃぐしゃになったクレムの体は、四方から何発もの弾丸が撃ち込まれるたびに、自動小銃で撃ち殺される一袋の子猫のように、何度もころげ回った。

22. ‘mighty’ (=very)

アイルランド英語は程度強調に大袈裟な語を使うのを特色とする。例えば、‘That tree has a mighty great load of apples.’(あの木にはすごく大変な量のリンゴがなるんだ)のように。これは黒人の英語でもよく使われる[26]。次の用例が見られる。

A ketch hound is a mighty respectable animal. (KRS, p.642, l.23)

猟犬ってやつはてえしたもんだぜ。

I’ve known the time when I was mighty proud to own one. (KRS, p.642, ll.23-24)

おれも昔、飼ったときはえらく自慢に思ったものよ。

“He’s a mighty playful dog, Lonnie,” Arch said, catching up a shorter grip on the tail, “but his wagpole is way too long for a dog his size, especially when he wants to be a ketch hound.” (KRS, p.643, ll.16-18)

「こいつあ、よくじゃれつく犬じゃあねえか、ロニー」アーチは尻尾を前より少し短めに握りな

おして言った。「こいつの尻尾は体の割りにはちと長すぎるぜ。猟犬になりたきゃ、なおのことだ」
"Mr. Arch, she's a mighty fine rabbit tracker. I—" (KRS, p.643, l.20)
「これは兎を追いかけるのがえれえ得意で—アーチの旦那、おらあ—」

23. 'for to～' (=to～)

アイルランド英語では不定詞の前に前置詞 'for' がつけられる[27]。次の用例が見られる。
She don't like for to be kept waiting. (CMB, p.25, ll.1-2)
待たされることの嫌いな女なんだよ。
I'm just passing through for to see my gal. (CMB, p.26, l.6)
女に会うので通りすぎるとこなんです。

24. 'done' を副詞・助動詞として使う

アメリカではこの話法は、他の多くの Irishism とともに存在している状況から察するに、スコットランドから直接というより、アイルランドを経由してアメリカに入ったと考えるのが自然だろう[28]。次の用例が見られる。
Clem had not done anything that called for lynching. (KRS, p.659, l.1)
クレムはリンチを受けるようなことは何もしていなかった。

25. 関係代名詞 'what' (=who, that)

'what' (=who) を関係代名詞 who の代わりに使うことは、一般に黒人の誤用と考えられているが、イギリス各地の方言にある。しかしアイルランド英語からの影響もじゅうぶん考えられる。なぜなら、ゲール語の "ce' n" は who, what の両方に用いられるので、who または which を使うべきところに 'what' が使われることがあるからである[29]。次の用例が見られる。
I got a gal what's waiting right at her door. (CMB, p.25, l.1)
門口で待ってる女があってな。

26. 再帰与格(reflexive dative)の 'me, you' を使う

"I got me a yellow gal, and I'm on my way to pay her some attention." (CMB, p.24, ll.13-14)
「混血の女がいるんでな、ちょっと気を見せてやりに行くとこなんだ」
"Before the time ain't long," Little Bo said, "I'm going to get me myself a gal." (CMB, p.23, ll.26-27)
「すぐそのうちに、俺も女の子を見つけに行くさ」ボー少年はいった。
"I'd like to grab me a chicken off a hen-house roost." (CMB, p.25, l.10)
「鶏小屋からひよこをつかみだしたいんだよ」

27. 'is' (=are)

"You and Mrs. Frost never told me what their name is." (CFS, p.5, ll.26-27)
「お前も奥さんも名前をきかせてくれたことはないが」

28. '形容詞+and+形容詞' (二詞一意語法)

この句の初めの二語 '形容詞+and' がかたまりとなって後ろの形容詞を修飾する二詞一意語法で

ある。アイルランドでは‘nice and’‘fine and’‘guy and’が多いが、アメリカでは‘nice and’の他に‘good and’が多い[30]。次の用例が見られる。

Arch was already mad enough about being waked up in the middle of the night, and Lonnie knew there was no limit to what Arch would do when he got good and mad at a Negro. (KRS, p.655, ll.16-19)

アーチは真夜中に起こされたことでもうすっかり頭にきているし、黒人に対して本当に腹を立てたときには何をしでかすかわからない男であることをロニーは知っていた。

"You know good and well why he got eaten up by the fattening hogs," Clem said, standing his ground. (KRS, p.656, ll.4-5)

「あんたはどうしてこの人が肥育中の豚に食い殺されたか、よくわかっているはずだ」クレムは一歩も退かずに言った。

You know good and well that's how he got lost up here in the dark and fell in the hog pen. (KRS, p.656, ll.11-12)

あの人がこの辺の暗がりの中で迷っちまって豚小舎に入りこんだことぐれえ、あんたもわかりそうなもんだ。

Arch Gunnard talks that way when he's good and mad. (KRS, p.657, ll.13-14)

アーチ・ガナードがあんな言い方をするときゃ本気で腹を立てているんだ。

"You must be out of your head, because you know good and well you wouldn't talk like a nigger-lover in your right mind." (KRS, p.660, ll.21-23)

「おめえは気が変になっているんだ。正気のときに黒ん坊びいきみてえな口はきかねえことぐらい、自分でもよくわかっているじゃねえか」

It usually stopped midway of her back and there we slapped it good and hard. (TSS, p.2, ll.9-10)

そしてそれが背中の途中で止まったところで思い切り叩く。

29. 疑問詞の後に添える‘it is’

アイルランド英語では疑問詞の後によく‘it is’を添える。この‘it’は先行主語といわれる[31]。次の用例が見られる。

I never heard them called anything but Swedes, and that's what it is, I guess. (CFS, p.5, ll.28-29)

スウェーデン人って呼ばれてるのしか聞いてないし、それが名前なんだろうよ。

30. ‘—like’を形容詞・副詞の語尾につける

アイルランド英語では‘-like’を形容詞・副詞の後ろに接頭辞のようにつけて、表現を和らげる[32]。次の用例が見られる。

"Jim," Mrs. Frost said, shaking her finger at him and looking at me wild-eyed and sort of flustered-like, "Jim, don't you sit there and let Stanley stop you from saving the stock and tools." (KRS, p.9, ll.4-6)

「ジム」とミセス・フロストはジムに向って、指を動かし興奮して慌て気味に私を見ながら声をかけた。「ジム、坐りこんでスタンリのいうことなんかきいて牛や道具をしまわなきゃだめよ。」

31. 'was'（=were)

was'を直説法(indicative)・叙想法(subjunctive)にかかわらず、また主語の人称・数にかかわらず使う[33]。次の用例が見られる。

If you was to walk out there now and tell them to move their autos and trucks off of the town road so the travelers could get past without having to drive around through the brush, they'd tear you apart, they're that wild, after being shut up in the pulp mill over to Waterville these three- four, maybe four-five, years. (CFS, p.10, ll.19-23)

今あそこへ出て行って通る人が、車を茂みに廻わさなくてもいいように道路から自動車やトラックを動かしてくれと言おうものなら、八つ裂になるぞ、三、四年も四、五年かも知れんがウォータヴィルのパルプ工場に閉じこもった後なんだから、とても手に負えないんだ。

32. 'pretty'をveryの意味で使う

Don't you reckon it would be a pretty slick little trick to lighten the road some, being as how he's ketch hound to begin with? (KRS, p.642, l.36-p.643, l.1)

なにしろこいつは猟犬なんだから、荷物を少し軽くしてやるってのはなかなか気のきいたやり方だとは思わねえかい？

33. 'that'をso（=to that extent）の意の指示副詞として使う

I ain't ever seen a hound in all my life that needed a tail that long to hunt rabbits with. (KRS, p.643, ll.22-23)

おれはな、兎をとるのにこんな長げえ尻尾が必要な犬なんぞこれまで見たこともねえや。

34. 'reckon'をthink, guessなどの意の主観叙述に使う

Don't you reckon it would be a pretty slick little trick to lighten the load some, being as how he's a ketch hound to begin with? (KRS, p.642, l.36-p.643, l.1)

なにしろこいつは猟犬なんだから、荷物を少し軽くしてやるってのはなかなか気のきいたやり方だとは思わねえかい？

"I reckon it's all right with you, ain't it, Lonnie?" Arch said. (KRS, p.644, l.5)

「ロニー、おめえの方はかまわんだろ？」とアーチが言った。

"Being as how I don't hear no objections, I reckon it's all right to go ahead and cut it off," Arch said, spitting. (KRS, p.644, ll.22-23)

「反対の声は聞こえねえから、さっさと切っちまってかまわねえと思うんだが」アーチは唾を吐いて言った。

"Well, I reckon I'll be getting on home to get me some supper," he said. (KRS, p.647, ll.8-9)

「さあて、おれもそろそろ帰って晩めしでも食うとするか」彼は言った。

"Reckon we'd better get Arch up to help look for Pa?" Lonnie said. (KRS, p.651, l.13)

「おらあ、アーチの旦那に起きてもらっておとっつぁんを探すのを手伝ってもらう方がええと思うだが」ロニーは言った。

"I reckon so," Lonnie said. (KRS, p.653, l.3)

「おらもそう思うだ」ロニーは言った。

"I reckon you know how he came to get eaten up by the hogs like that," Clem said, looking straight at Arch. (KRS, p.655, ll.22-23)
「あんたはあの人が、どうしてあんな風に豚に食い殺されちまったかわかっているはずだ」クレムはアーチを真直ぐに見て言った。
"I reckon my time has come," Clem said. (KRS, p.657, l.13)
「おれもいよいよこれでおしまいらしい」クレムが言った。
What do you reckon I've been waiting all this time for if it wasn't for a chance to get Clem. (KRS, p.660, ll.1-2)
これがクレムをやっつける機会じゃねえとすりゃ、おれはこれまで一体何を待っていたことになるんだい？
"I reckon he's over there now." (KRS, p.661, ll.4-5)
「もうそこに着いていると思うだが」

35. 'eating' を 'food' の意味に使う

There was enough good eating for a hundred hungry men. (CMB, p.25, ll.27-28)
ひもじい人が百人いたって十分だ。

36. 'don't,' 'doesn't' の使い分けをしない

She don't like for to be kept waiting. (CMB, p.25, ll.1-2)
待たされることの嫌いな女なんだよ。
Don't be ashamed of him, Lonnie, if he don't show signs of turning out of to be a bird dog or a foxhound. (KRS, p.642, ll.20-21)
別に恥ずかしがるこたあねえぜ、ロニー。おまえんとこの犬が鳥や狐をとる犬にはなりそうもねえってことがわかってもよ。
"That don't make no difference," Lonnie said. (KRS, p.649, l.16)
「たいしたことじゃあるめえさ」ロニーは言った。

37. 主語の人称・数にかかわらず 'ain't' を使う

Haven't, hasn't の代わりにも使う
It ought to be that, if it ain't. (CFS, p.5, l.29)
どのみちそうにちがいないさ。
"God-helping, Jim," I said, "you and Mrs. Frost ain't scared of the Swedes, are you?" (CFS, p.17, ll.18-19)
「これはこれは、ジム。あんたも奥さんもスウェーデン人にびくびくしてはおらんのだろうね？」
I skin their mules for them, and I snake their cypress logs, but when the day is done, I'm long gone where the white-folks ain't are. (CMB, p.23, ll.16-18)
俺は騾馬を追ったり糸杉を曳いたりしてやってるが、夜になれば白人のいないとこへずっと行ってるんだ。
"Before the time ain't long," Little Bo said, "I'm going to get me myself a gal." (CMB, p.23, ll.26-27)
「すぐそのうちに、俺も女の子を見つけに行くさ」ボー少年はいった。

"Just be sure she ain't Candy-Man's, boy, and I'll give you a helping hand." (CMB, p.23, ll.28-29)
「キャンディ・マンのでないかたしかめろよ、そしたら手をかしてやるぞ」
But there ain't much use in living if that's the way it's going to be. (CMB, p.26, ll.29-30)
でもそうなるより仕方ないなら生きていたってむだです。
"His tail's way too long for a coon hound or a bird dog, ain't it, Arch?" somebody behind Lonnie said, laughing out loud. (KRS, p.642, ll.14-15)
「こいつの尻尾はあらい熊や鳥をとる犬にしちゃあ、長すぎるんじゃねえかい？アーチ」誰かがロニーのうしろで言ったので、みんなが笑った。
I ain't ever seen a hound in all my life that needed a tail that long to hunt rabbits with. (KRS, p.643, ll.22-24)
おれはな、兎をとるのにこんな長げえ尻尾が必要な犬なんぞこれまで見たこともねえや。
"I reckon it's all right with you, ain't it, Lonnie?" Arch said. (KRS, p.644, l.5)
「ロニー、おめえの方はかまわんだろ？」アーチは言った。
Going home to supper, ain't you? (KRS, p.647, l.13)
晩めし食いに帰るんだろ？
"Lonnie," Hatty said again, trembling in the cold night air, "Lonnie, your pa ain't in the house." (KRS, p.648, ll.6-7)
「ねえ、あんた」ハッティが寒い夜気の中で震えながら言った。「あんた、おとっつぁんがうちにいねえだよ」
"How do you know he ain't?" he said. (KRS, p.648, l.9)
「おとっつぁんがいねえだと？」彼は言った。
I've been taking too much from you, but I ain't doing it no more. (KRS, p.655, l.35)
おれは我慢しすぎるほど我慢してきてやったが、もうこれ以上我慢なんぞしねえからな。
"You ain't going to kill Clem this time, are you, Mr. Arch?" Lonnie asked. (KRS, p.659, ll.35-36)
「アーチの旦那、まさか、クレムを殺すつもりじゃねえでしょうな？」ロニーはたずねた。
We ain't got a thing to cook for breakfast. (KRS, p.664, ll.4-5)
朝めしにするものがなんにもねえだよ。
"No. I ain't hungry." (KRS, p.664, l.17)
「おらあ、腹なんか空いちゃいねえ」

38. 'gal'（=girl）という語形を使う

Make way for these flapping feet, boy, because I'm going for to see my gal. (CMB, p.23, ll.5-6)
このばたついている足に道をあけてくれよ、女に会いに行くんだからな。
"Before the time ain't long," Little Bo said, "I'm going to get me myself a gal." (CMB, p.23, ll.26-27)
「すぐそのうちに、俺も女の子を見つけに行くさ」ボー少年はいった。
"I got me a yellow gal, and I'm on my way to pay her some attention." (CMB, p.24, ll.13-14)
「混血の女がいるんでな、ちょっと気を見せてやりに行くとこなんだ」
Yellow gals don't like to be taken by surprise. (CMB, p.24, l.16)
混血の女ってのは不意打ちを食うのは好かんぞ。
Candy-Man's gal always waits for him right at the door. (CMB, p.24, ll.18-19)

キャンディ・マンの女はいつだって門口でお出迎えさ。

Eight miles to town, and two more to go, and he7d be rapping on that yellow gal's door. (CMB, p.24, ll.27-28)

町までは八マイルで、その先二マイル行けば混血女のドアを叩くことになるのだ。

I got a gal what7s waiting right at her door. (CMB, p.25, l.1)

門口で待ってる女があってな。

That yellow gal was waiting, and there was no time to lose. (CMB, p.25, ll.15-16)

あの混血女が待ってるんだからまごまごしちゃおれん。

He could see that yellow gal waiting for him only a couple of miles away. (CMB, p.25, ll.23-24)

あの混血女がたった二マイルのところで自分を待っている姿が浮んだ。

I'm just passing through for to see my gal. (CMB, p.26, l.6)

女に会うので通りすぎるとこなんです。

His yellow gal was on his mind. (CMB, p.26, l.9)

混血の女が心に浮んだ。

Because I just got to see my gal before the Monday-morning sun comes up. (CMB, p.26, ll.13-14)

女に会わなくちゃいかんことがあるだけですから、月曜の朝日が出ないうちなんです。

The yellow gal of his was, waiting for him at her door, straining on the tips of her toes. (CMB, p.26, ll.25-27)

あの自分の混血女が、門口で一生けんめい爪先立ちして待っていてくれるのだ。

II　その他の文体の特徴に関して

コールドウェル作品の文体に関して、彼は分詞構文を多く用いていると言える。これはヘミングウェイ、フォークナー、スタインベックといった同時代のアメリカ作家と比べてもきわだった特徴である。一般的には分詞構文は文学的・文語的な表現で、日常的な英文にはむやみに使うべきではないとされているが、生彩あるダイナミックな表現、ひきしまった迫力ある簡潔な文体の構築には、分詞構文や現在分詞・動名詞が重要な要素となってくると考えられる。'The Strawberry Season' (4 pages)の中には分詞構文が合計10回、コールドウェルの珠玉の作品、'Crown-Fire' (5 pages)の中には合計18回、そしてこの論文でとり扱った'Country Full of Swedes' (15 pages)の中には分詞構文が合計58回、'Candy-Man Beechum' (5 pages)の中には合計5回、'Kneel to the Rising Sun' (24 pages)の中には合計90回使われている。

III　発音などの特徴に関して

発音に関しては、コールドウェルは南部訛りを綴りの上に写し出すことをしなかった作家である。'ain't' 'dum' 'gal' など既に語形として確立している綴り字以外は使わない作家である[34]。

また、コールドウェルは、'plain style' とか 'flat style' といって、簡明直裁な口語体を駆使した文体を確立した。「複雑にして込み入った技巧をこらした構成には関心を向けたことはない」と彼自身語っている。コールドウェルの作品には、生々として新鮮さにあふれたジョージアの地方語が、正確に、しかもふんだんに映し出されている。作家が登場人物の言葉を写実的に書こうとすれば、特に会話英語の場合は、どうしても正書法を無視した、擬似音声学的な臨時的綴り字を案出するものであるが、コールドウェルはそういうことはしなかった。彼は方言・俗語は自由に使うが、綴り字は辞書が認めたものを使い、勝手に綴りを変えたりはしなかった。コールドウェルのいわゆる 'Georgia style' を通して、素朴な若者たちや、滑

稽で風変わりな人物たちの描写が、逸話風に語られるところにコールドウェル文学の特色がみられる。

おわりに

ゼミの宿題として渡された「資料」の例文を拾っていくうちに私は、だんだんとAmerican Irishismに関心を持つようになった。そこで‘Country Full of Swedes’、‘Candy-Man Beechum’、‘Kneel to the Rising Sun’の3つの作品におけるアイリシズムの影響について見てきた。どの作品においてもアイルランド英語が及ぼす影響は大きい。3つの作品を通してアメリカ英語とアイルランド英語を比較してみると、表現の仕方が異なることがわかる。いくつかの例を挙げるとすれば、「怒る」という単語は、アメリカ英語では‘angry’を用いるが、アイルランド英語では‘mad’を用いる。また、アメリカ英語で‘finally, forever’の意味に用いられる単語は、アイルランド英語では‘for good’を用いる。

そして、アイルランド英語である時を表す名詞の接続詞的用法の‘the time’、‘the moment’、そして‘the first time’などの時や順序を表す名詞は今日ではアメリカの特徴であると考えられているくらい、アイルランド英語が普及しているのである。また、アイルランド英語は、黒人英語にも使われる。

コールドウェルの作品においてアイルランド英語を用いることによって、人種的偏見や荒廃した南部社会の状況を的確にとらえ、より繊細に状況を表現し、強調していると考えられる。

アメリカという国は様々な人種が入り混じった国であるが、アイルランド人が母語であるアイルランド英語を身につけてアメリカにやってきた結果、アメリカ英語にアイルランド英語が多大な影響を及ぼしていることに私自身正直驚いた。それと同時にアメリカ英語とアイルランド英語では表現の仕方がずいぶん違うことにも驚かされた。普段私たちが使っている英語の語源を辿っていくと、アイルランド起源の英語が半分以上を占めていることに気付かされる。コールドウェルの作品を通して、アメリカ英語においてアイルランド英語が及ぼしている影響がどれほどのものかということを知ることができた。これらの他にもどのような表現の違いがあるのか更に追求していきたいと思う。

註

(1) E・コールドウェル著、田中融二訳『作家となる法』Call It Experience : The Years of Learning How to Write（至誠堂新書, 1965）p.220, ll.8-9.

(2) 亀井俊介『アメリカ文学史 講義―現代人の運命―〈3〉』（南雲堂, 2000）p.42, ll.6-9.

(3) 藤井健三『アメリカ英語とアイリシズム』（中央大学出版部, 2004）p. ii , ll.4-6.

(4) 藤井健三, 前掲書, p.1, l.23-p.2, l.9.

(5) 藤井健三, 前掲書, p.2, ll.8-9.

(6) 藤井健三, 前掲書, p.220, ll.5-7.

(7) 藤井健三, 前掲書, p.220, ll.17-19, p.228, ll.18-19.

(8) 藤井健三, 前掲書, p.220, l.25, p.228, l.27-p.229, l.2.

(9) 藤井健三, 前掲書, p.221, ll.11-13.

(10) 藤井健三, 前掲書, p.221, ll.22-24.

(11) 藤井健三, 前掲書, p.222, ll.6-10.

(12) 藤井健三, 前掲書, p.222, l.18.

(13) 藤井健三, 前掲書, p.222, ll.24-27.

(14) 藤井健三, 前掲書, p.223, ll.9-10.

(15) 藤井健三, 前掲書, p.223, ll.18-19.

(16) 藤井健三, 前掲書, p.223, ll.26-27.

(17) 藤井健三, 前掲書, p.224, ll.8-10.

(18) 藤井健三, 前掲書, p.224, ll.21-22.

(19) 藤井健三, 前掲書, p.224, ll.24-25, p.248, ll.17-19.

(20) 藤井健三, 前掲書, p.225, ll.10-12, p.227, ll.14-16, ll.18-19.

(21) 尾上政次『現代英文法講座第八巻　現代米語文法』(研究社, 1957) p.141, ll.5-6.

(22) 藤井健三,『アメリカ英語とアイリシズム』(中央大学出版部, 2004) p.226, ll.9-12.

(23) 藤井健三, 前掲書, p.228, ll.5-6.

(24) 藤井健三, 前掲書, p.230, l.8.

(25) 藤井健三, 前掲書, p.231, ll.20-21.

(26) 藤井健三, 前掲書, p.243, ll.2-5.

(27) 藤井健三, 前掲書, p.243, l.15.

(28) 藤井健三, 前掲書, p.245, l.27-p.246, l.3.

(29) 藤井健三, 前掲書, p.234, l.26-p.235, l.4, p.246, ll.20-21.

(30) 藤井健三, 前掲書, p.248, ll.4-6.

(31) 藤井健三, 前掲書, p.230, ll.24-25.

(32) 藤井健三, 前掲書, p.231, ll.7-8.

(33) 藤井健三, 前掲書, p.235, ll.24-25.

(34) 藤井健三, 前掲書, p.226, ll.16-18.

参考文献

藤井健三『アメリカ英語とアイリシズム』(中央大学出版部, 2004)。

加藤修・北嶋藤郷『アースキン・コールドウェル研究』(奥村印刷株式会社出版部, 2003)。

尾上政次『現代英文法講座第八巻　現代米語文法』(研究社, 1957)。

加藤修訳『生きとし生けるものの物語』(新樹社, 2001)。

鈴木重吉・飯沼馨・永原誠訳『コールドウェル「苺つみの季節・馬盗人」』(英宝社, 1957)。

亀井俊介『アメリカ文学史 講義―現代人の運命― 〈3〉』(南雲堂, 2000)。

E・コールドウェル著、田中融二訳『作家となる法』

(原題：*Call It Experience: The Years of Learning How to Write*) (至誠堂新書, 1965)。

Erskine Caldwell. *THE STORY OF ERSKINE CALDWELL.* (The University of Georgia Press, 1996) .

Edwin T. Arnold, ed. *Erskine Caldwell Reconsidered* .(University Press of Mississippi, 1990).

The Journal of the American Literature Society of Japan (2004, No.3).

(卒業論文指導教員　北嶋　藤郷)